

## パーヴェル・フロレンスキー『コストロマ県ネレフタ郡の チャストゥーシカ集』（1909）を読む

熊野谷 葉子

### 本翻訳の意義

本稿は、宗教哲学者パーヴェル・フロレンスキー（Павел Александрович Флоренский. 1882-1937）が、自ら採録し編集した『コストロマ県ネレフタ郡のチャストゥーシカ集』（1909）に序文として寄せた論稿の翻訳である。<sup>1</sup> 同書は最も古いチャストゥーシカ集のひとつであるだけでなく、収録された 1000 篇近い歌詞が、すべて一定の範囲内で一定の時期に集められたものであり、表記にも実際の発音上の特徴を表す工夫がされるなど、フォークロア分野のみならず言語学や歴史研究にとっても重要な情報を多く含んでいる。

同時に、フロレンスキーが神学大学在学中からコストロマ県の農村に毎年出かけて行き、聖書を教えたり図書館を作ったりしながらフォークロアを採録し、その中から真っ先にチャストゥーシカを編集、出版したという事実も興味深い。神学者にして物理や数学の専門的知識を持ち、文学や芸術への造詣も深かったフロレンスキーが、当時新しい民謡として注目を集めながらも内容の卑俗さや形式の単純さゆえ非難と軽蔑の対象でもあったチャストゥーシカに、どのような興味を持っていたのだろうか。

ここに訳出した論稿には、そうした若き日のフロレンスキーの民衆観、フォークロア観がよく現れている。彼は、チャストゥーシカは世界中に存在する短詩の一つで非常に古い起源と普遍的な特徴を持つと考え、その例証として日本の短歌もあげている。また、男性の歌うチャストゥーシカの多くが「卑猥なチャストゥーシカ」であるため活字にできなかったことを残念ながら、その卑猥さの本質が明るさと笑いにあることを喝破している。そこには、直接民衆生活を観察し、できる限り正確で誠実な活字化を試み、かつ文学的、社会学的な視点から分析しえたフロレンスキーならではの、深い洞察が見られるのである。

フロレンスキーの序文は現地のチャストゥーシカの概要や演奏の方法について一定の理解を与えてくれる。しかしそれでも、収録されたテキストは難解で、方言や民謡特有の表現、風俗習慣についての注釈なしには、ロシア語を母語とする読者でも理解することは難しい。訳者はかつて、長谷見一雄先生主宰のスラヴ神話研究会でアレクサンデル・ブリ

<sup>1</sup> Флоренский П.А. Несколько замечаний к собранию частушек Костромской губернии Нерехтского уезда // Собрание частушек Костромской губернии, Нерехтского уезда. Кострома, 1909.

ユクネルの「スラヴ神話」翻訳に携わったが、そこで痛感したのは、古典的な論文を理解するためにいかに膨大な下調べが必要かということであった。100年以上前のロシアの農村の歌を理解するためには、まずそれに直接関わった研究者の論を正確に読まなければならない。そのため本訳稿では、訳者による注を脚注として付し、フロレンスキー自身による原注はその旨を明示した。この序文の翻訳に続いて、いつか歌のテキストそのものを原文で提示し、日本語訳と解説をつけて発表する機会を持つことができれば幸いである。

### 「コストロマ県ネレフタ郡のチャストゥーシカ集への覚書」

民衆生活を対象とする学術的な著作は、たいてい次の二つのタイプのいずれかに属する。第一は概説的な論文や参考書で、民衆生活の一般的な特徴を俯瞰的に上から観察し、情報をまとめて伝えたもの。第二は、各地の民衆生活における個別の事象を、個別に記録したものである。

前者が、ともすれば極端で、それゆえ早急な一般化につながりやすいのに対し、後者は、とかく生活全般の文脈から切り離された断片的な報告になりがちである。前者はいわば「練られ過ぎ」で生活の具体性が失われており、後者は「練られ足りない」ため内容が偶然的で重要項目の抜き出しもなく、屑を多く残している。前者では形が内容を圧迫し、後者では内容が形になっていない。

しかし、これらの中間を行く道がある。空想的な一般化というスキュラも無意味な事柄が作る大渦も<sup>2</sup> 避けて通れる王道、これが民衆生活の「モノグラフ的」研究方法である。この研究方法が目指すものは、「民衆生活のプロセスを、生活そのものから理解する」ことであり、民衆と無関係の外的な現象や個々の事例の単純な断定は、理解の手段としない。生活上の現象は生活の文脈の中で読みとく。現象の意味と生活における意義は、生活そのものから理解すべきであって、学問の一般的原則というそれ自体検証を必要とする代物や、まして主観的な解釈によってはならない。これが、生活習慣のモノグラフ的研究の課題である。だがそのためには、生活の多少なりとも特徴ある端々を精査する必要がある。生活という織物の織り目の奥まで入り込み、かつ全面的に研究する。これが民衆生活の「ミクロ的研究」である。その学徒がこれまでにいなかったわけではないが、それでもまだ、所与の確立された解決法というよりは、学にとっての要請であり課題なのである。

ただ、我が国の風習の研究には急がねばならない理由がある。鉄道、工場、技術革新、解放的思想、新聞雑誌…こうした要因は、腐敗を促進する微生物のように急速に風習を破壊している。10年から15年もたてば、我が祖国のはかりしれない価値を持つフォークロ

---

<sup>2</sup> オデュッセウスが海峡で怪物カリュプティス (Charybdis) の立てる渦を避け、反対側の六つ頭の怪物スキュラ (Scylla) に六人の部下を食われた話による。

アの多くは、跡かたもなく消え失せてしまうかもしれない。まだ可能なうちに、時間のあ  
るうちに、できる限り保存しなければならないのだ。

---

このように主張しながら、私は4年以上にわたって（1904～1909年）出来る限りつづ  
ぎに、コストロマ県ネレフタ郡ノヴィンスク郷トルプィギノ村<sup>3</sup>を中心とする半径約10  
ヴェルスタの圏内を観察してきた。この範囲は研究対象によって少しずつ異なり、歌など  
を集める際などにはより広く、方言差などの研究ではより狭くなった。トルプィギノ村を  
本拠地としたのは俗な理由からだったが<sup>4</sup>、こうして収集した資料を見てみると、私は運  
命によって実に好い環境へ運ばれたのだということに気づく。その理由は後述しよう。

資料の収集と整理はまだ終わってはいないが、部分的に印刷できる分量にはなった。総  
括は資料全体の公表までおくとしても、こうした仕事が回答しうる理論的な問題の一つに  
は答えておこう。コストロマ県は、言語学的にもフォークロア学的にも、我が国でも最も  
複雑で興味深い県の一つである。様々な民族の衝突と様々な時期の植民活動は、この地域  
独特の生活と気質を形成しただけでなく、住民の驚くべき民族的言語学的多様性をも生ん  
だ。この県はモザイク状で、モザイクを形成する個々の小片は互いに関連を持ちながらも  
離れており、しばしば本質的に異なっている。ある場所と、隣接する別の場所とで住民の  
民族構成が明らかに分断されているということがままたあるのだ。

この、言語学上および生活習慣上の一群をどう解釈したものだろうか？ あるいはいろ  
いろな時期に植民してきた人々の中で、溶けきらなかったものの名残だろうか。あるいは  
フィンその他の非スラヴ系の種族がスラヴ系の種族と混じり合い、自民族の痕跡を遺した  
ものだろうか。もしかしたら場所によって原因は異なり、どちらもあったのかもしれない。  
いずれにせよ、特定の場所を詳しく研究することで、コストロマ県の地図上には風習や語  
彙や方言の特徴を示す境界線がいくつも引かれることになるだろう。いわば等民族線、等  
方言線、等風習線である。その土地で話される単語や、発音上の特徴、独特の宗教的社会的  
現象に基づく小話、といったものの分布を調べることで、コストロマ地方の古代民族学  
地図が再建できる可能性もある。無論、どのような移住のプロセスがあり得たかを探るた  
めにこうした探求が重要なことは言うまでもない。

---

<sup>3</sup> 現在はイワノヴォ州ヴォルガ沿岸区に属する。詳しくは熊野谷葉子「思想家フロレンスキーとチ  
ャストゥーシカ」『教養論叢』No.132, 2011年参照。

<sup>4</sup> フロレンスキーの神学大学での友人セルゲイ・トロイツキーの父親がトルプィギノ村の教会の司  
祭であったため。

収集した資料の公開を、私はチャストゥーシカから始めよう。本書のチャストゥーシカはほとんど 1908 年の後半に記録されたものだが、私はできるだけ音声学の方法に従って「音通り」記録するようにした。残念ながら文字が足りないため発音上の細かい特徴は省略されている。それを避けるにはペンではなく録音機が必要だっただろう。音声記号を用いるという手もあるが、これではかなり分量が増えてしまう。

私は、発音の個人的な特徴を保存するよう努め、あえて統一しなかった。文法は言語のためにあるのであって、文法のために言語があるわけではない。間違いや逸脱は通常の現象に劣るものではない。それもまた言語が生きていることの現れである。言語の奇形や異常は、言語の正常な構造や特徴を理解するための手段となりうる。

採録時の主な観察対象は、研究対象地域の中心すなわちトルピギノ村から遠くは離れなかった。トルピギノ村以外では、ヤコヴレフスコエ村とメドヴェトコヴォ村で採録が行われたが、ここには工場があり、そのため近隣一帯の情報が集まっている。

本書収録の資料は、一部は私が自分で記録したものだが、大半は私の同僚たちが記録したものである。トルピギノ村のシメオン・トロイツキー司祭の御家族、同村の農夫 A.K. フレノフ氏、モスクワ神学大学の学生 B.A. イリンスキー氏の助力なくして、この仕事が世に出ることはなかったであろう。深く感謝の念を表したい。

この本に掲載されている資料は「チャストゥーシカ」である。チャストゥーシカまたはチャスターヤ ペースニャ<sup>5</sup> は民謡の一種で、テンポが速くリズムが細かく、メロディーがよく変わるのが特徴である(速うたい)。これが伴奏のガルモニカ<sup>6</sup> の響きによく合う。より狭義には、チャストゥーシカとは、速うたいの中でも最も普及し独特の構造を持つ「ランヂュフうたい」<sup>7</sup> という種類の歌を指し、ここから「ランヂュフ・チャストゥーシカ」

<sup>5</sup> частая песня. 1 語目のアクセントの位置が通常と異なり 2 音節目にあることを、フロレンスキーはアクセント記号を付して示している。

<sup>6</sup> гармоника は、ボタン式アコーディオン「ガルモニ」гармонь の指小形。ガルモニには種類も別称も多く、フロレンスキーはここで他に гармошка, тальянка および тальяночка(イタリア・ガルモニ), дву-рядка および дву-рядочка (ボタンが 2 列の種類) を挙げている。

<sup>7</sup> игране ландюха. ランヂュフとは現イワノヴォ州南部を流れるランヂュフ川またはその流域の村名に由来すると思われる。ちなみに現在のネレフタ地区のチャストゥーシカには「ランヂハ Ландиха」という節があり関連が認められるが、これは練り歩きに使う節でフロレンスキーの「ランヂュフ」との間にはずれがある。

という名前ができた。この選集では、1 番から 727 番、791 番から 864 番<sup>8</sup>が「ランヂュフ・チャストゥーシカ」である。

もう一つの、やはり明らかに区別される速うたいの一種が「ホロヴォード・チャストゥーシカ」<sup>9</sup>であり、本選集では 893 番から 968 番に当たる。

ホロヴォード・チャストゥーシカとは、内容的にはホロヴォードの歌を思わせるが、形式が一定していないことでそれとは区別される速歌である。このチャストゥーシカは本来のホロヴォードの歌と混在している。

次の速うたいは「歩き」または「踊り」のチャストゥーシカ<sup>10</sup>で、「陽気な」チャストゥーシカとも呼ばれ、867 番から 872 番に当たる。この種のチャストゥーシカは「踊りに合わせて」、つまり伴奏楽器の代わりに歌われる。これに隣接するのが「叫び」<sup>11</sup>であって、婚礼その他での踊りの場で、またランヂュフの合間に見られる（873～892 番）。そして最後に、上述の歌とはかけ離れているのが 728 番から 792 番の「新兵のチャストゥーシカ」<sup>12</sup>である。それからもう一つ、形式的にはランヂュフにごく近い「卑猥なチャストゥーシカ」をあげておこう。実に残念なことだが、外的な諸事情から、マルティアリス<sup>13</sup>のエピグラムを想起させるこれらの詩は、印刷することができない。

---

チャストゥーシカとはそもそも何なのだろう。一時的な歌なのか、土着の歌なのか？つまりチャストゥーシカとは、崩壊しつつある生活習慣や民衆生活の墮落に見合った現代の歌にすぎないのか、それとも昔から今まで他の土着の歌と共存してきた歌の一つなのか。研究者の多くは、こうした問題の可能性すら考えずに、チャストゥーシカを民謡の歪んだ模倣者と決めつけている。「民謡は生きているか？」「新しい民衆詩」「新しい時代、新し

---

<sup>8</sup> 原文では 793 番から 866 番とあるが誤植と思われる。

<sup>9</sup> частушка хороводная. ホロヴォードという名称は通常輪舞とそこで歌われる歌を指すが、フロレンスキーが指す内容はより広い。コストロマ州の民族音楽に詳しいロシア・科学アカデミーの T.キリューシナ教授（民族音楽学）によれば、フロレンスキーが観察したのは当時まだロシア農村では新しい踊りであったカドリールであり、それに合わせて歌われた一連のチャストゥーシカであろうということである。

<sup>10</sup> частушка ходовая или плясовая. フロレンスキーの記述と該当するチャストゥーシカのテキストから見て、この「歩き」はゆっくりした練り歩きではなく、速いテンポと律動的な動きを持つと思われる。

<sup>11</sup> выкричка.

<sup>12</sup> частушка рекрутская. 新兵自身の立場から、また送る立場から歌われる。

<sup>13</sup> Marcus Valerius Martialis (後 40-103/4) ローマのエピグラム詩人。技巧的で皮肉の名手、種々雑多な主題で色事なども多く書いた。

い歌」「民衆詩歌における新しい息吹」「工場の詩歌」「民衆創造の歪曲」…こうしたいくつかの論文のタイトルは、著者たちが対象をどのように見ているかを如実に示している。<sup>14</sup> チャストゥーシカの中に民謡の最新の発展段階を見出し、そこに各種工場の増加が反映していることは通例のようになっている。だが私にはこんな通例を認める気にはなれない。チャストゥーシカの中に見るべきものは、生活習慣の崩壊とは無関係の、古来の歌の一種である。それどころか、チャストゥーシカの形式は古くから他のジャンルと共存しただけでなく、先行さえしていたとも考えられるのだ。

チャストゥーシカの古さは、第一に、民衆木版画等に古いチャストゥーシカが見られることに現れている。

チャストゥーシカの原始性はまた、実に様々な民族にチャストゥーシカと同型の詩があることにも表れている。チャストゥーシカを持たない民族などいないのではないだろうか。興味深いのは、未開、半未開の民族も典型的なチャストゥーシカを持っていることだ。

読者諸氏にチャストゥーシカ型の歌の普遍性を知ってもらうため、数例を挙げよう。次に挙げるのは、I.I.マイヤーが採録したバタック語（ジャワ島）の詩である。

Ulah sok hajang ka gula,	砂糖を欲しがるな、
Tatjan bisa nanggur kawung,	砂糖ヤシを採れないなら。
Ulah sok hajank ka gula,	私を欲しがるな、
Tatja bisa nanun sarung,	シャツを縫えないなら

これと類似の構成を持つものに、中国の「詩経」やマレー語の「パントウン」がある。後者は「押韻する4行詩で、独特のパラレリズムが支配的。最初の2行では何らかの自然現象が、続く2行で何らかの思考や名言が述べられるが、ヨーロッパ人には前半と後半の

---

<sup>14</sup> フロレンスキーはここで注を付し、チャストゥーシカに関する文献を列挙している。以下はその原注を簡略化したものである。(1) *Зеленин Д.* Песни деревенской молодежи. Вятка, 1903. (2) *Его же.* Сборник частушек Новгородской губернии // Этнографическое Обозрение. 1905, № 2 и 3. (3) *Его же.* Новые веяния в народной поэзии. О частушках Вятской губернии // Вестник Воспитания. 1901, № 8. (4) *Его же.* Черты современного народного быта по частушкам // Русские Ведомости. 1903, № 8. (5) *Его же.* Поэзия «казенных детей» // Волховский Листок. 1904, № 266. (6) *Линева Е.* Жива ли народная песня? // Русские Ведомости. 1903, № 31. (7) *Белорецкий Григ.* Заводская поэзия // Русское Богатство. 1902, № 12. (8) *Соколов И.* Деревенская молодежь в ее песнях-«частушках» // Биржевые Ведомости. 1903, № 379, 391, 403. (9) *Степанов В.И.* Деревенские посиделки и современные народные песни-частушки // Этнографическое Обозрение. 1903, IV. (10) *Штакельберг.* Новое время — новые песни. О частушках Новгородской губернии // Россия. 1901, № 916. (11) *Успенский Гл.И.* Новые народные стишки // Собрание сочинений. Изд. Павленкова. Т. 3. (訳注: この出版社によるウスペンスキーの全集は数種あるが、フロレンスキーは出版年を明記しておらずいずれか不明。) (12) *Марков Д.* Частушки, собранные в Ветлужском уезде Костромской губернии. Казань, 1907.

関連を読み解くのは困難。パントウンには、原始的な詩歌にはつきものの主観性が独特の明快さをもって現れる」のだという。次はパントウンの例である。

Memuti umbak di rautau Kataun	カタファの岸に白い波,
Patang dan pagi tida berkala.	昼夜を問わず荒れている。
Memuti bunga de dalam kabun,	庭には白い花がたくさん。
Sa tangkei saja jang menggila,	でも私は一人を思い恋で気が狂う

または,

Ager dalam bertambah dalam	深き水はなお深くなり,
Ujan di ulu bulum lagi tedoli;	雨は絶えず丘を流れる。
Hati dendam beptambah dendam,	我が心の熱き望みは強まった,
Dendam dauu bulum lagi sumboh.	いまだその希望は叶えられない。

あるいは,

Jeka sunggulu bulan pernama,	本当に満月になったのなら,
Mengapa tiada di parar bintangt.	月はどうして中天で光らない?
Jeka sungguh tuan bijaksana,	もしあなたが誠実で信頼できるなら,
Mengapa tiada dapat di tintang,	どうして私はあなたと会えない?

ここで読者諸氏はおそらく日本の「短歌」を想起するだろう。実際、短歌とはチャストゥーシカが完成形に近づいたものに他ならず、もとは歌垣、つまり歌のホロヴォードから始まって（我が国のホロヴォードと比較されたい）人々の間に広まったものだ。名人による短歌の例を Г.А.ラチンスキー<sup>15</sup> の訳で挙げよう。

Встретились с ней мы	私と彼女が
----------------------	-------

<sup>15</sup> Григорий Алексеевич Рачинский (1853-1939) 哲学者、文学者、翻訳家。フロレンスキーはこれらの訳の出典を明らかにしていないが、ラチンスキーは1914年に短歌の翻訳詩集『日本の詩歌』を出版しており、これはドイツ語から訳していると思われる。本稿ではラチンスキーの露訳とその日本語に続けて、元歌を記載した。短歌本文の表記と番号は小学館『新編日本古典文学全集』に拠る。元歌の遡及と表記等については、実践女子大学の近藤みゆき教授にご教示頂いた。この場を借りて御礼申し上げる。

熊野谷 葉子

впервые, как осенью  
падали листья;  
снова сухие летят,  
И уж в могиле она. (Хитамаро)  
ま草刈る 荒野にはあれど もみち葉の 過ぎにし君の 形見とぞ来し  
柿本人麻呂 (萬葉集 卷第一 47)

Если бы все лето  
цвели на горах наших  
нежные вишни,  
вряд ли так крепко бы мы  
эти любили цветы. (Акахито)  
あしひきの 山桜花 日並べて かく咲きたらば はだ恋ひめやも  
山辺赤人 (萬葉集 卷第八 1425)

Страстью сгорая,  
тебя поджидаю я...  
Ты ли идешь там?  
Нет, то лишь ветра порыв  
рвет занавеску мою. (Принцесса Нукада)  
君待つと 我が恋ひ居れば 我が屋戸の 簾動かし 秋の風吹く  
額田王 (萬葉集 卷第八 1606)

Утром осенним  
росой отягченныя  
клонятся травы;  
больше о дальней тебе  
пролил ночами я слез. (Нарихира)  
秋の野に笹わけし朝の袖よりも逢はで来し夜ぞひちまさりける  
在原業平 (古今和歌集 卷第十三 恋歌三 622)

Если бы белых  
цветов не так сладок был  
запах пьянящий,  
もしも白い花々の  
酔わせるような香りが  
かくも甘くなければ



кто б их решился сорвать,                      誰がそれを摘もうと思うだろう  
 кто б их не принял за снег?! (Цураюки)    誰がそれを雪と間違えないだろう?    (ツラユキ)  
 梅の香の降りおける雪にまがひせば誰かことごとわきて折らまし  
 紀貫之 (古今和歌集 卷第六 冬歌 336)

Горько я плакал,                                      私はひどく泣いた  
 и мокры от слез моих                              私の涙で  
 складки одежды...                                  着物の折り目が濡れてしまった…  
 Спросят: „Что это с тобой?“                      「どうしました？」と人が訊いたら  
 „Дождик весенний” — скажу. (Аноним)        「春の雨で」と私は言おう    (詠み人知らず)  
 音に泣きてひちにしかども春雨に濡れにし袖と問はばこたへむ  
 大江千里 (古今和歌集 卷第十二 恋歌二 577)

Если б зачли мне,                                      もしも私の  
 по службе чиновной,                                  恋の苦しみが  
 все муки любви:                                      官位に考慮されるなら  
 пятый бы класс получив,                              私は五位を拝受して  
 я бы советником быть! (Аноним)                  相談役になっていただろう!    (詠み人知らず)  
 このころの 我が恋力 記し集め 功に申さば 五位の冠  
 (萬葉集 卷第十六 3858)

最後に、ヨーロッパ文化を持つ民族のチャストゥーシカの例として、ソレア（3行詩）と  
 コプラ（4行詩）<sup>16</sup> を、多少文学的ではあるが K.バリモントの訳で掲載しよう。

Слово песни — капля меда,                      歌の言葉は蜜のしずく  
 что пролилась через край                          心に満ちて  
 переполненного сердца.                          縁からあふれぬ

Та, кого люблю я сердцем,                      僕が心から愛する人は  
 точно белая гвоздика,                              朝に花ひらく  
 что раскрылась поутру.                          白きなでしこ

<sup>16</sup> 原文には複数形で soleares と copulas とあるが後者は coplas の誤記か。共に短詩形のスペイン民謡。

Хоть слезами оросили  
мы твою любовь с моею, —  
не взрости ей, не расцвести.

私とあなたとの愛は  
いくら涙で濡らしても  
育たぬもの、咲かぬもの

Как мне быть с тобой, не знаю, —  
ты, как Кадикс, за стеною,  
поступиться не могу.

どうしたらいいんだ、あなたは  
まるでカディスの町、その壁の  
奥へ僕は入れない

От тоски я умираю, —  
ты еще живешь на свете,  
ты, умерший для меня.

この憂い、私は死にそう  
あなたはこの世に生きているのに  
私にとっては死んだも同じ

Как жемчужины-признанья:  
чуть жемчужина сорвется,  
за одной — другая, третья,  
ожерелье распадется.

真珠玉のような愛の告白  
一つ真珠が外れれば  
次も、またその次も…  
首飾りはバラバラに

Камень, тронь его огнивом,  
брызжет слезы из огня.  
Это камень! Что же будет,  
с сердцем, с сердцем у меня!

火打ち石を打てば  
炎の涙がほとばしる  
それが石！ では私の  
心ならどうなるだろうか！

Луна заскучала о солнце  
за три часа до разсвета.  
Так о тебе я скучаю,  
жизнь и блаженство мое.

月は太陽を想う  
夜明け前の3時間  
私はあなたを思う、  
私の命、私の悦び

Мать, что тебя породила,  
ранняя роза была.  
Она лепесток обронила,  
когда тебя родила.

あなたを生んだ母は  
早咲きのバラだった  
彼女は花びらを散らした  
あなたを生んだ時

このようなチャストゥーシカの例はいくらでも挙げられる。だが本稿はチャストゥーシ

カの研究論文ではなく、コストロマの、しかも一地域のチャストゥーシカ集の序文なのだから、今挙げた例で十分だろう。世界中にこれほど広まっている形式が、我が国では生活習慣の崩壊や工場労働というような特殊な条件とだけ結び付いているはずがないことは証明された。だがこれは、我々がチャストゥーシカとは何かを深く追求していけばより明確になるだろう。紙幅の都合でランヂュフ・チャストゥーシカに限定して話を進めよう。

---

比較的少数の、社会的なテーマのチャストゥーシカを除けば、ランヂュフ・チャストゥーシカは民衆抒情歌、しかもエロチックな抒情歌であると言える。だが公衆の面前で、しかも陽気に騒いでいる友達の間で表現されるエロチシズムは、そもそも心の奥底から出たものではない。割に表面的なもので、熱情というより娯楽である。

恋する人は、たとえ熱情と苦しみに心が焦がれていても、人々の前ではあえて軽薄なふりをするだろう。チャストゥーシカに見られる冗談のトーンは、エロチックな要素を覆い隠してしまう。

深刻さの中の冗談、冗談の中の深刻さというチャストゥーシカの二重性が産む、この挑戦的で熱っぽい魅力は、ハイネの詩に通じる。ハイネにもチャストゥーシカにも、奥底には涙と傷ついた心の痛みが見られることがある。ただこの涙と痛みは、ハイネにおいても民衆においても、実際よりもはるかに軽く提示されるのである。

こうしたチャストゥーシカの内容的特徴は、形式にも通じる。チャストゥーシカは、あたかも人の中からその感情を一瞬で放り出すかのようだ。抒情詩は現在を表現するが、チャストゥーシカは現在どころか瞬間の抒情詩なのである。本質的に印象詩で、小さく完結し、エレガントな構成の形式を持つ。4行詩のチャストゥーシカは自足している。これより長くてはいけないしこれ以上短くもできない。チャストゥーシカは完成しており、ソネットやガザル<sup>17</sup>や短歌にも増して形の定まったものである。

この完全性の結果、チャストゥーシカは思索的というよりは華やかであり、それゆえ動的でやや品がなく跳ねるような拍子を持つ。(これもまたハイネに似ている)チャストゥーシカの韻律はコケティッシュで刺激的だ。

チャストゥーシカの芸術的完全性を示しているのは、そのパラレリズムである。通常のチャストゥーシカは前後半2行ずつから成る。このうち前半では何らかの形象、多くの場合自然現象が語られ、後半ではその意味が、その時の心情から説明される。だが形象とその説明というパラレリズムは、時に分かりにくい。それは(単に形象が不適切なのでなけ

---

<sup>17</sup> アラビア語の抒情詩。同一の韻律と脚韻を持つ5～15の対句から成る。

れば), 比喩が主観的である以上に深遠だからである。例えば, チャストゥーシカではしばしば何らかの俗信や占い(カードや指輪を用いた)が暗示され, また民衆的な, 時には世界的に知られた象徴が用いられる。例えば, 果実への言及があった場合(「ななかまどを食べる」「ななかまどを折る」「葡萄をもぐ」「さくらんぼを摘む」), これは間違いなく恋愛関係の成立を意味している。もし, 何かの「果実が緑である」なら, それは性的な未成熟を示す。「茶を飲む」は恋愛の成就, 「水を飲む」は失恋, 「花をつむ」は嫁に出されることを意味する。首飾りは, 特にそれが白い(真珠のように)ものなら, 悲しみの象徴である。チャストゥーシカの象徴は歌の象徴に近く, この言語芸術の分野の研究はかなり進んでいるから, 本稿ではその関係を示すだけで十分だろう。チャストゥーシカの象徴を体系化しようとする試みは, 前述の Д.ゼレーニンの著作「ノヴゴロドのチャストゥーシカ集」(注13)に見られる。チャストゥーシカのパラレリズムの意義と技巧性を一例だけあげて説明しよう。

У мило́ва черны брови, —	わたしの彼は黒い眉
черны как у во́рона:	まるでカラスのような黒
ожидай, мой ненаглядный,	見ても見ても見飽きぬあなた
резставанья скорова.	きつともうすぐお別れね。

「いとしい彼」の眉がカラスと比較されている。彼の眉は娘にカラスを想起させるのだ。カラスは不吉な鳥, よくない徴候であるから, 迫りくる不幸, つまり別れの予感が生まれる。あるいはこのチャストゥーシカには, 別れの予感と原因の両方が含まれているのかもしれない。黒い眉は美のしるしだからである。娘たちは皆黒い眉の男が好きだ。まさにそれゆえ「もうすぐ別れが来る」のかもしれない。

もう一例を見よう。

Все подружки шьют подушки,	友はみんなクッション縫ってる
а мне надо дипломат.	でも私が要るのは春ものコート
Все подружки идут замуш,	友はみんなお嫁に行く
а мне надо погулять.	でも私が要るのは一遊び

一見すると, クッションとコートが出てきたのは偶然で, 単に韻を踏むために見える。だがそうではない。思考の関係は明らかだ。友だちは嫁に行こうとしている。そのためには自分の財産を作らなければならない。クッションを縫うというのは結婚のシンボルとして最適である。主人公の娘は考えている。「私はまだ遊ばなくては。遊ぶためにはおしゃ

れをしなくては。だから春ものコートが必要だわ」  
もう一つ挙げてみよう。

На горе стоит аптека,	山の上には薬屋さん
любовь сушит человека.	恋は人を渴えさせる
Не любила — была бела:	私は色白だったのに
Полюбила, — побледнела.	恋を知ったら蒼ざめた

最初は、恋と薬屋の関係が全く分からない。だがここでは情熱の力が表現力豊かに示されている。あまりに渴え、蒼ざめたので、薬で治療しなければならないのだ。

この思考の断続性は、時にひどく主観的で偶然的な連想の産物に見える（本当は違う）のだが、チャストゥーシカを現代の象徴派詩人たちの抒情詩に近づけている。それらは、道の途中の里程標を飛ばして最初と最後だけを残しておく。また両者は、形式上の特徴の共通性によっても近づけられる。すなわち響きへの志向、例えば二重の押韻である。詩行の前半末が後半末と押韻するか、少なくとも似た響きを持つ。こうしたチャストゥーシカの響きの例をいくつか挙げよう。<sup>18</sup> Мимо окон ходит боком.. (窓の外を横歩き…), Еко горе муш Григорей! (なんて困った亭主のグリゴリー), Возьму мыльцо, пойду мыцца.. (石鹸もってお風呂に行こう…), Не от дела похудела (仕事でやせたんじゃないの…), Все подружки шьют подушки.. (友はみなクッションを縫ってる…), Милый Саша, воля ваша.. (いとしいサーシャ、あなたの自由よ…), Дайте ходу пароходу.. (汽船を行かせて), Подпояшу я Енашу.. (エナーシャに帯を締めてあげる…), Дали волно любить Колю.. (オーリヤを好きになってもいいって…), Ты, гармошка, белы-ножки.. (ガルモーシカよ、白い脚…), Через полё вижу Олю.. (野原の向こうにオーリヤが見える…), Не любила, - была бела; Полюбила, - побледнела.. (恋する前は色白だった、恋を知ったら蒼ざめた…) 等々。

詩行の響きは、他の方法で達成されることもある。母音反復と子音反復である。ある新兵送りのチャストゥーシカにはこんな素晴らしい子音反復が見られる。Медна мера загремела / Над моею головой. (銅の物差しガチャリと鳴った／僕の頭の上で…) 金属のぶつかりあう音が聞こえて来るようである。

最後にもう一つ、チャストゥーシカを「新しい」詩歌に近付けている特徴がある。それは、手の込んだエロチシズム、洗練された恋愛感情表現、その発露の多様性である。例えば、女の子の同性の友人への恋情（恋人同様「黒い眉」を持つ）、恋人からもらったスカ

<sup>18</sup> 以下はフロレンスキーが音韻反復の例として挙げているチャストゥーシカの詩行で、意味上の前後関係はない。下線は類音反復の部分に訳者が引いたものである。

ーフに寄せる思慕（一種のフェティシズム）、一度に複数の相手に抱く恋愛感情（主人公は相手一人一人を品定めしている）などに見られる。裏切りに対する嫉妬や従順さ、時には完全な諦観にいたる感情の微妙なニュアンスの多様性は言うまでもない。繰り返すが私はチャストゥーシカの研究をしているのではなく、たまたま目にした特徴のいくつかを素描しているだけだ。それでも特筆せざるにられない。農村社会におけるエロチシズムとその形態は、社会の文化的上層部にいる人々には病的で過剰なものと思われているが、詳細な研究に値するのだ。

チャストゥーシカは、我が国の農民たちの風俗がきちんとしていることの証人である。しばしばこの逆のことが言われ、いくつかのチャストゥーシカが証拠に持ちだされている。だがそこで忘れられているのは、社会道徳というものを他から切り離して扱ってはならないということである。表現が直接的で婉曲語法のないチャストゥーシカは、歌い手が言い残したことは何もないということまで語り、すべての事物をそのままの名称で呼ぶ。では、知識人社会で同じくらい開放的なインテリのチャストゥーシカが歌われるところを想像してみるといい。農村で耳にするようなものは絶対に聞かれまいだろう。現代では軽い小説がようやく開放的になり始めているが、それでさえ皆恐れをなして逃げ出している。

エロチシズムはランチュフ・チャストゥーシカの唯一の対象であるから、資料の体系化にあたっては、恋愛の発展と開花、そして衰退の推移を極力守り通すようにした。チャストゥーシカはおおむね次のようにグループ分けされている。恋の始まりと発展（No.1-No.131.）、恋の最盛期、逢瀬、別れ（No.132-No.219）、女の子に関する噂（No.220-No.251）、結婚についての思案（No.252-No.296）、両親との関係と家庭内の喧嘩（No.297-No.364）、別れと切実な苦悩（No.365-No.474）、無関心とアプローチ（No.475-No.476）、恋人との喧嘩と幻滅（No.477-No.610）、裏切りと嫉妬（No.611-No.676）、無作法（No.677-No.699）、恋人の他の女性との結婚（No.700-No.727）、これらとは少し違う非個人的なチャストゥーシカ（No.793-No.827）、冗談とからかいのチャストゥーシカ（No.828-No.864）である。Д.ゼレーニンのように、詳細にチャストゥーシカを分類し、章題をつける試みもある。これは教科書などに「典型的な」チャストゥーシカを掲載するには都合のよい方法かもしれないが、ある地域の「全ての」チャストゥーシカを出版するには、この分類は非常に人工的で恣意的なものになってしまう。一つ一つのチャストゥーシカは生活上の事実そのものであり、非常に多面的で、それにどんな表題をつけるかは研究者の判断ひとつだからである。総合的な出版には事項索引をつけた方がはるかに有益であろう。

内容的にも形式的にも、またその発生から言っても、チャストゥーシカは民謡のスペクトルの一番端の光である。このスペクトルの最初の光はブリリーナや歴史歌謡や霊歌である。これらが民衆生活の聖なる不変の有様を表現しており、それゆえ高齢者たちの「老年

の」財産であるのに対して、チャストゥーシカは民衆生活の世俗的でうつろいゆく有様に即し、それゆえ年少者の「若さ」に属している。このため、チャストゥーシカは不変のブイリーナとは異なり、常に変化している。チャストゥーシカの性格は一定しない。チャストゥーシカは常に 同様に *eadem sed aliter* しかし異なる というわけだ。常に新しく感じられ、以前とは違う。だがその新しさは、世界と同じくらい古い。いわば世界にたった一つの初恋のような新しさである。常に同じだが、毎回新たに生まれている。チャストゥーシカは常に変化するが、発展はしない。時の支配下にあり、日々の使用に供されながら、チャストゥーシカは非歴史的で、過去も未来も知らない。それゆえチャストゥーシカは、民族的意識の表現者となることはなく、もっぱら個人的な、特殊な意識の表現者である。チャストゥーシカは最高の真実のためにあるのではない。もっぱら自分の気分、自分の興味のためにある。チャストゥーシカのこうした個人主義と主観主義にこそ、現代詩の個人主義および主観主義とのきわめて深い類縁性がある。チャストゥーシカ、それは民衆的デカダン主義であり、民衆的個人主義であり、民衆的印象主義である。だが忘れてはならないのは、ここにあげた各種の傾向は特に現代が勝ちえた成果ではなく、常に存在し、周期的に強まる詩歌の「傾向」だということである。こう考えると、チャストゥーシカの特質の多くが理解される。

まず形式上の特徴。チャストゥーシカは気まぐれに不規則に作られている。幾世紀に亘る経験に拠って立つことなく、一瞬一瞬の自らの存在に頼り、歴史を持たないチャストゥーシカは、持ちこたえるということが稀である。出だしは素晴らしいのにそのレベルの靈感を最後まで維持できないことが多く、時には結末がひどくお粗末になってしまう。または逆に、出だしはちぐはぐだったものが終わりには表現力豊かで美しい歌となることもある。おそらく詩的創作には一瞬の靈感のひらめきだけでなく、伝統や流派といったものも必要なのだろう。また時に、極端な個人主義は単調さに助けられる。チャストゥーシカでは個々の歌がはっきり線引きされていない。それらはしばしばお互いに似ており、一つのチャストゥーシカ集は似た者同士の比較的少数のグループに分けられる。これは、互いに独立した現象が何であれ大量に集まった状態、特に統計学上の「大数の法則」が働くケースに似ている。個々の現象の独立性が非常に強いと、人々は統計的中間値を生み出すのだ。個体の勝手なふるまいは集団を統計法則の奴隷にする。チャストゥーシカの流動性と可動性からして、古いチャストゥーシカが、適宜記録されない限り保存されえないのは自明である。したがって、時機を得た収集がなおさら重要なのである。毎年新しいチャストゥーシカが生まれ、古いチャストゥーシカが消えていく。仮に今、ある地域のチャストゥーシカで工場生活が歌われているとすれば、それはチャストゥーシカそのものの特質ではなく、生活自体の特質である。まさにチャストゥーシカという鏡は、暮らしの中でおきる全てを映し出す。革命の年にはペテルブルグ県とノヴゴロド県で多くの政治的、社会的チャストゥーシカが作られた。しかしだからと言ってチャストゥーシカは革命の詩歌であると言えるだ

ろうか？

ブイリーナは、民衆の風習、昔ながらの生活の深みの現れである。一方、チャストゥーシカは目先の関心事であり、たちまち過ぎゆくせに常に入り江の水面に立っているさざ波である。さざ波は時に大波にもなり、泡にもなるが、その後水面は静かになり、ふたたびさざ波が立つのである。

このチャストゥーシカの瞬時性にこそ、研究者の興味はある。チャストゥーシカには発生段階における (in statu nascendi) 民衆詩歌、その誕生が見られる。常に若く、常に沸騰しているチャストゥーシカは、民衆生活の発酵途上のワインである。ここには古代の悲喜劇の萌芽のようなものさえ見える。チャストゥーシカがしばしば歌い交わされることや、ガルモニストの形象に古代劇の主役が見て取れることを考えれば、それは一層明らかになる。チャストゥーシカのリズム自体にもディオニュソス賛歌 (versus ithyphallicus) を思わせるところがあり、「卑猥なチャストゥーシカ」はギリシャのディオニュソス祭における男根崇拜の歌に比される。

---

他の種類のチャストゥーシカについて、ここで多くを語ることはすまい。ホロヴォード・チャストゥーシカの形式に関してだけ言っておこう。最終行 (ホロヴォード本来のチャストゥーシカでは4行め) で必ずキスに言及されること、これがホロヴォード・チャストゥーシカの形式的特徴である。テンポは極めて速く、リズムは一定で伝染性の陽気さを持つ。その形式の美しさと強弱二種のアクセントをもつ独特の詩行ゆえ、このチャストゥーシカは詩人たちに手本として見せるに値する。内容に関しては、ホロヴォード・チャストゥーシカはその陽気さゆえ粗野なユーモアが抜きんでており、最終行でキスに言及せんがための愉快的ナンセンスもしばしば生じる。

これにも増してディオニュソスの熱狂が見られるのが「歩く」または「踊る」チャストゥーシカであり、更に婚礼その他の場での「叫び」では、この熱狂は酒宴のどんちゃん騒ぎに変化してしまう。

新兵のチャストゥーシカは、子供たちと親たちの新しい関係 (他のチャストゥーシカと比べて) が興味深い。ランヂュフ・チャストゥーシカとホロヴォード・チャストゥーシカでは父世代と子世代はふつう対立し殴り合う関係にあったが、新兵送りのチャストゥーシカでは緊密さと血のつながりが歌われている。ハイネのスタイルがニキーチン<sup>19</sup> のそれにとってかわったようだ。新兵送りのチャストゥーシカはなぜか、文芸詩のセンチメンタリ

---

<sup>19</sup> 詩人 Иван Саввич Никитин (1824-1861) を指す。



ズム的な修辞法に呼応しているように見える。

新兵のチャストゥーシカは、言うまでもなく、もっぱら若者、男の子達のものである。他の種類のチャストゥーシカは「男の子」が歌うこともあれば「女の子」が歌うこともあるが、「男の子」の歌は「女の子」のそれとはっきり異なっている。「男の子」のチャストゥーシカはだいたいにおいて粗野で、自分の恋愛対象の「彼女」に言及せずにはすませることはごく稀である。このチャストゥーシカの、ユーモアあふれる、からかうような調子は時に品のない法螺話や辛辣な侮辱に移行する。恥ずかしげのない冗談も男性のチャストゥーシカの特徴だ。このため、奇妙なことに本選集のチャストゥーシカのほとんどは「女の子」のものになってしまった。チャストゥーシカの主な担い手が男性であることはよく知られているというのに。理由はしごく簡単で、男の子のチャストゥーシカには学術書と言えども印刷しかねる単語や表現があまりに多いのである。それでこの詩歌の大半は今公開することができない。

一方「女の子」のチャストゥーシカはと言うと、これもお上品とは言えないものの、はるかに控えめで柔らかい。優しさや、感傷的な感情が優位をしめているのだ。涙や怒り、悲しみはしばしば見られ、からかうこともあるが、嘲笑は極めて稀である。女の子のチャストゥーシカは男の子のチャストゥーシカよりも技巧的で鋭敏であり、文学の詩に近づいている。野や森ののびのびとした広がりには少ないが、その代わり心に秘めた、都会的でさえある、意地悪な色気を感じさせる。男の子のチャストゥーシカの粗野さには、率直さと素朴さ、そして善良さが感じられるが、女の子のチャストゥーシカには、その感じやすさの一方にある種の知的さ、いわゆるエスプリ、心の奥のドライな理性さえ見て取ることができる。驚くには当たらない。善良さと粗野な単純さ、ドライさと洗練された感性、という組み合わせは精神科学において最もよく見られるものだ。「男の子」と「女の子」のチャストゥーシカの差は、双方が歌った対応するチャストゥーシカを比べてみるとかなりよく分かるだろう。一例を示そう。

男の子が歌う：

Неужели ты завянешь,

травушка шелковая?

Неужели не вспомнешь,

дура безтолковая?

しおれやしないだろうね、

絹のような草よ？

思い出せないんじゃないかならうね、

頭の悪いバカ女？

女の子が歌う：

Неужели ты завянешь,

аленький цветочик?

しおれやしないでしょうね

赤いお花よ？

Неужели не вспомняешь,  
миленький дружок?

思い出せないんじゃないでしょうね、  
いとしいあなた？

女の子のチャストゥーシカに関してはもう一つ言うことができる。すでに目を通した読者は気付かれたことと思うが、内容的に明らかに女の子が作ったチャストゥーシカの中で、歌い手が自分を男性扱いしていることがある。これは言いまちがい (lapsus liguae) ではない。言いまちがいにしても多すぎる。また、韻のための詩的逸脱 (licentia poetica) とも考えられない。多くの場合、女性形にしても韻律は整っており、性を入れ替える意味はないからだ。では、これは何か？ 答えは、ジェンダー心理学の分野や文学史の例を思い出せば簡単だ。よく知られているように、詩歌というものは女性の仕事ではなく、女性詩人たちはつねに男らしい女性、女性と男性の「中間的な形態」をもっていた。従って古代から現代に至るまで、女性詩人たちが自分を男性扱いする傾向があるのも理解できよう。田園の女性詩人たちも例外ではなかったらしい。彼女たちの作ったチャストゥーシカが再び女の子たちの間に広まり、内容と形式上の性が一致しない歌が歌われたのである。

チャストゥーシカに関するこの断片的な記述を終えるにあたり、一言付け加えるべきだろう。この仕事の意味は、私のこの覚え書きにではなく、原資料の出版にある。だがもしこの覚え書きがチャストゥーシカへの何らかの関心を呼び、コストロマ県の他の地域でも同様の採録活動をしようとするきっかけになったならば、私は非常に満足である。

その際、ひとつのチャストゥーシカのヴァリエントをできる限り全て書きとめておくことが、共同事業のためには非常に重要である。それがあって初めて、民衆創造のプロセスがどのように進行するのか、そのプロセスの本質が何なのか理解されるからである。個人が作っているのか、詩人たちの靈感による作品が広まる過程で崩れていくのか、あるいは逆に、一つの詩から別の詩へと次第に完成されていくものなのか、さもなければ一般大衆の無意識で盲目の本能による創作なのか。もちろんヴァリエントを集めるのは退屈で、それを印刷するのは贅沢すぎるように思われる。しかしある一つのチャストゥーシカのすべての変種を研究することは、ヴァリエントを無視して数を追いかけることよりも重要かもしれない。

この選集には、読者の理解できない単語がかなりあるかもしれない。こうした語の説明は載せていないが、近いうちに私が研究した地域の詳しい辞書を世に出したいと思う。ここでは一つだけ、かなり頻繁に遭遇する難解な表現を説明しておかねばなるまい。特に «моёт» は «мой-от» つまり «мой» に古い定冠詞のついた形が、コストロマ方言の中に今日まで残っているものである。